Osaka University Knowledge Archive

Title	東洋医学と西洋医学
Author(s)	川俣, 順一
Citation	癌と人. 1994, 21, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23958
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

東洋医学と西洋医学

川　俣　順　一*

1．はじめに

私はかねてから医学に東洋も西洋もないと思っています。それで，この表題はあまり気にいらないのですが，感じとしては何となく分かり易いのではないかと考えて選びました。

現在わが国をはじめ，ほとんどすべての国で行われているのは，西洋医学といわれるものです。しかし，各国にはそれぞれに国の歴史や伝統に基づく伝統的な医療や民間療法が行われていることも事実です。わが国で東洋医学と言っているものは，中国の伝統医学である中国医学を指しているといってもよいと思います。元来，東洋医学は中国医学のみならず広く朝鮮，日本，東南アジア，インドさらに中近東まで含んだ地域で行われてきた伝統医学をいうのですがここでは中国医学に限らせていただきます。

2．中国医学と中医学

厳密にいいますと中国医学と中医学とはまったく同じではありません。紀元前480年頃の孔子の時代に中国においては灸があったと思われるいくつかの証拠があります。その後，漢の時代に中国ではもっとも古くてしかも現存する医学書である「黄帝内経」というものができました。しかし，1973年に中国の洞庭湖の南の長沙で馬王堆第３号の漢墓の発掘で見つかった医学書にはその黄帝内経よりも約150年程前に，すでに灸のことが書かれていたことがわかりました。その後，診籍という書物が書かれ，それに初めて針治療のことも出ています。その後2000年程の間，連綿として針や灸などが伝えられ今日に及んでいます。これを中国医学といってもよろしいでしょう。それに対し，近年，中国において毛沢東の革命により新しい中国が生まれた時，もう一度伝統的な中国医学の見直しが進み，中国においては伝統的な医学として，従来からあった西洋医学と共存しつつ進むことになりました。これを現在では中医学と呼び，中国の大きな都市には中医学を教える中医学院も設置されました。中医学院では，伝統的な中医学のほか西洋医学も教え，針，灸，按摩のほか漢方薬も処方し，また西洋医学的な治療法，手術も認められています。最近では約40年前に設立された北京ならびに上海の中医学院はそれぞれ６年制の医科大学に昇格しているほどです。それで，これからの話ではすべて中医学を使うことにします。わが国でも漢方薬が健康保険で認められたように，従来西洋医学一辺倒であったわが国の医療にも，中医学の価値が認められるようになってきました。一方，はり師，きゅう師という資格は一定の教育を受けた後，厚生大臣の実施する国家試験に合格しなければ免許が与えられず，はり師，きゅう師として治療にあたることはできません。

3．中医学の日本への伝来

紀元562年に朝鮮半島の高句麗から知聡という人が来日し，そのとき針や灸の書物164巻を持ってきました。このときからわが国の針灸術が医療に使われるようになったといえます。701年制定の大宝律令には医博士，鍼博士，按摩博士が定められました。このうち，鍼博士だ

＊大阪大学名誉教授，関西鍼灸短期大学名誉学長・名誉教授

けは明治維新まで続きました。一方，わが国における最古でしかも権威のある医書として注目されている「医心方」という本があります。これは，丹波康頼という人が編纂したもので，当時すでに隋唐から伝えられた医書は非常に多かったのですが，臨床的に使うのにはたいへん不便でしたので，いわば医学全書のような形でそれらの文献をまとめたといわれています。これは全30巻からなり，薬物治療，鍼灸術，養生法，食事療法にわたり，また，病気の分類からみれば，内科，外科，産科，婦人科，小児科などが挙げられています。

現代の漢方の始まりは15世紀の末頃に明からの留学から帰国した田代三喜に曲直瀬道三が学んでからと言えます。江戸時代に入り，吉益東洞，山脇東洋などの有名な医師が現れ，ことに山脇一派の医師は人体解剖を重視しさらにオランダ医学へ近寄り，杉田玄白らによって「解体新書」が1774年に訳されたことは皆さんご存じだろうと思います。

現在わが国で行われている東洋医学的医療の源流はこの辺にあるといっても差し支えないでしょう。源は朝鮮半島，あるいは中国から日本に入った中国の医学が日本においていろいろな医師によって変遷を経て今日に及んだといえます。その間に中医学の本質的なものに日本流の改変が加えられたことも否めません。その影響は今も日本には残っています。

4．陰陽五行説と五臓六腑

陰陽とは，万物すべてに陰と陽の面があり，相互に対立したり協力したりするというのです。五行説では万物は，木・火・土・金・水の基本要素で構成されておりこれも相互に協力したり抑制したりする関係にあるといいます。もう一つ，五臓六腑という言葉もご存じでしょう。五臓六腑にしみわたるなどという，あの五臓六腑です。中医学では五臓とは，肝，心，脾，肺，腎をさし，六腑とは，胆，小腸，胃，大腸，膀胱，三焦をさします。三焦の焦は熱源をさし，かんたんにいえば，生体を恒温に保つ機能と言えます。ここでいう肝とか腎とか小腸，大腸という臓腑の名前は西洋医学でいうものとは異なります。明治初期に西洋医学で人体の各器官に命名するとき，従来，中医学で使っていた名称を流用したための混乱によるものです。因みに，解剖という言葉は，上に書いた黄帝内経の中の霊枢という本に，すでに出ています。

5．未病を治す

中医学においては，陰陽をはじめ五行が，また五臓六腑がバランスを保っていると健康であり，このバランスが崩れ始めると，未病という状態であり，この時期ではまだ復元力がありますが，バランスを回復できなくなった状態が病気だというのです。これは現代医学から見ましてもまことに理にかなったことと言えます。

6．気血

このほかに，中医学では気血ということがいわれています。

気というものは実体は見えないのですが，宇宙全体に充満しているもので，人体においては生きている限りこの気が働いていると考えます。われわれも元気，病気，気にするなど気ということばを知らず知らずに使っています。血というのは血液のことのみではなく，気を実体としてあらわすものが血といえます。気が滞れば血も滞るというのです。

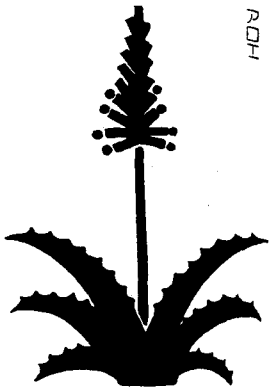
7．中医学における病気の原因

中医学では病気の原因を内因，外因，不内外因に分けています。内因は，喜怒憂思悲恐驚であり，外因は，風寒暑温燥火と癘気（現代医学の感染症に近いもの）でそれ以外のものを不内外因といいます。たとえば，私達が良く使うカゼ（風邪）とは外因の風が引き起こしたものであったわけです。この頃時々見かけたり耳にす

る言葉に瘀血というのがあります。この瘀血も不内外因の一つで全身の血液の流れが停滞したり局所の血液が停滞したりするものを指し，現代医学では循環障害の一つとされていますが，中医学では瘀血あるいは血毒といいます。

8．中医学における診断と治療『弁証施治』

中医学における診断は弁証であり，これにより治療を行うことを「弁証施治」（証をもとにして治療を行う）といいます。これは中医学の本質といえます。証とは，陰陽，虚実，表裏，寒熱といいます。診察にあたっては四診すなわち望診，（目で見る），聞診，（音声を聞く），問診（訴えをよく聞く），切診（手で触る，脈診もその一つ）が基本で，その上で証を決めて治療が行われるのです。現代医学で，いろいろな検査を行って，病気を診断し，それに基づいて薬が使用されたり手術が行われたりするのとはかなり大きな違いがあります。それですから，たとえば風邪といえば葛根湯というような使い方は本来の中医学の治療法ではしないのです。風邪といっても，それにかかっているひとの症状，体質は一人一人異なるのですから，証を良く定めて，それにかなった治療をしなければならないのです。もっとも，現代医学でも医師は同じ病名の患者さんに対しても，年齢や体質などを考慮して，薬の種類や分量を変えたり，最もふさわしい手術の適用，術式を選んで治療に当たっていることはいうまでもありません。しかし，まだ西洋医学のみでは対応できない病気にかかっている，あるいは症状の患者さんも少なくありません。そのためにも，中医学と西洋医学が協力して新しい医学が生まれることが切望されています。そのためには中医学の臨床的研究のほかに，基礎的研究，つまり，なぜ効果があるのかということの研究がなされることも必要です。漢方薬については，その構成成分の効果について研究されています。しかし，漢方薬の多くはいろいろな薬草などの配合で治療効果がみとめられているので，たんに各成分個々の分析と作用機構の研究だけでは済まないと思います。針灸の作用としては鎮痛効果がなぜ発揮されるのかということが詳しく研究されていますが，とくに注目されているのは全身の防衛機構，免疫機能が高くなることです。

9．むすび

東洋医学と西洋医学の最終目標は病気に悩む患者さんの治療であり，さらに未病を治すといわれるように，病気になる前に体の歪みを正すことにあるということを最後に申しまして，この話の締めくくりといたします。